## 書　評

# 松尾剛次　『中世都市鎌倉の風景』

吉川弘文館、１９９３、２１９頁、２０００円

米　井　輝　圭

近年、中世都市鎌倉の研究はますます盛んになっているが、軍事都市や政治都市としての側面と並んで、宗教都市という位相における鎌倉の分析もまた、大いに進展の度合を深めていることは喜ばしい限りである。その中でも、最近特に意欲的な論文を発表しつづけている研究者の一人が松尾剛次氏であるが、その氏がこのたび以前からの考察をまとめる形で世に問うた一冊が、『中世都市鎌倉の風景』ということになる。本書は、形式的には都市鎌倉に興味を抱くすべての人に解りやすくする配慮を込めた、いわば一般書の体裁をとっている。しかし内容的には、著者がここ数年にわたって世に送り出してきた諸論文をもとにして、全体的に統一感をもたせる形で再構成したものであり、随所に斬新性もうかがわれて都市鎌倉研究の進展にとって重要な論点を提起する一書となっている。また、著者は鎌倉新仏教研究の一方の旗手でもあって、本書はその新たなる第一歩を期するための準備作業としても位置づけられることになるかもしれない。「これまで鎌倉仏教の解明が、幕府のおひざもとの中世都市鎌倉という場に則してなされたこともほとんどなかった」という現状がすでに指摘されていることにかんがみても、このような視点で都市鎌倉を理解しようとする枠組を示そうとした著者の射程が奈辺に設定されているかをうかがい知ることができよう。

本書の構成は、以下のとおりである。

はじめに
第一　鎌倉の中の将軍御所
第二　鎌倉の中の鶴岡八幡宮
第三　都市鎌倉の四境
第四　鎌倉の町衆
おわりに

この内、「第二」および「第三」では、寺院の境内絵図や結界絵図などの絵画史料を用いて、都市鎌倉の中心と周縁とに関して都市の祭祀空間のコスモロジー論を著者は展開している。また「第四」では、京都のそれと比較して従来あまり問題とされる機会の少なかった鎌倉祇園会をとりあげて、鎌倉における町衆の存在を解明していくための手掛かりとすべき試みが行なわれる。これらのことからもわかるように、本書はその構成として、宗教都市としての鎌倉という側面に重点を置いた著作であるともいえよう。

本書の「第一」と「第二」は、都市鎌倉の中心に関する考察である。中世都市鎌倉を中心と周縁という観点から論じる視点は石井進氏の提唱によって考察が進められてきたところであるが、松尾氏は従来の研究が両者のうち、境界的な地域にあたる周縁部に考察が多く中心部はあまり触れられてこなかったことを指摘しつつ、政治的中心としての幕府と、宗教的中心としての鶴岡八幡宮の所在が担った意味を問いかけようとしている。「第一」は、将軍御所すなわち幕府所在地の移転の過程を残された史料から可能な限り再現しようとしたもの。史料の再検討を通して通説を見直すなど、現時点で可能な限り文献から幕府の所在地の移り変わりを検証しようとした作業であり、今後の歴史考古学の成果が氏の説に対してどのような答えを出していくのかが待たれるところである。

「第二」では、鶴岡八幡宮の景観を示す絵画史料によって、絵図を四つのゾーンに分けて、御所のある都市鎌倉の中心部は聖なる地である八幡宮からみれば実は準聖域圏であったことが指摘されている。ここで氏の立論の根拠となった「享保十七年鶴岡八幡宮境内図」がもはや鎌倉に将軍（公方）も御所も存在しない時代に作られたものであるという問題はあろうが、しかし「準聖域圏」は中世においても妥当であったろうと思われる。そして同じ鎌倉の「中心」といっても、政治的中心（御所）は宗教的中心（鶴岡八幡宮）を統制し、後者は前者を準聖域に位置づけているという、中心のもついわば二重構造を明らかにした点において評価されるべきであろう。

この「第二」では、ほかにもいくつかの重要な指摘がなされている。具体的には、鎌倉の官祭的なまつりである鶴岡放生会のありさま、中世の鶴岡では若宮の比重が大きかったのではないかという分析、そして鶴岡八幡宮仁王会の変遷の記述などである。なかでも鶴岡放生会は平家を滅ぼした源氏側の滅罪および死んだ平家の人々の救済のために始まったのではないかという考察は、もしそれがいえるなら足利尊氏が戦乱による死者の菩提をとむらうために諸国に安国寺利生塔を造立した事実とも併せて、御霊信仰的な施策が中世の武家政権の指導者にとって意外なほど深く認識されていたということを示す材料ともなるはずである。

ただここで、鶴岡八幡宮という宗教施設が都市の一つの「中心」でありえたという鎌倉の特殊性について明確な説明が必ずしもなされていないことは残念に感じた。鎌倉におけ

る鶴岡八幡宮の中心性は、著者によれば八幡宮が他の諸寺院に超越する立場を鎌倉において保証されていたこと、および「雛壇型都市」鎌倉の中核の位置を占めているからということになるだろう。確かに鶴岡は武家政権の守護と都市鎌倉のしずめを担った、重要な宗教施設であった。しかしそれだけで鶴岡が鎌倉の中心であると無前提に決めてしまうことはできまい。思えば、平城京にとっての東大寺や、平安京での賀茂上下社・延暦寺・石清水八幡宮などは、似たような機能を担っていたにもかかわらず都の外側に存在したのだし、初めから平安京の区画内に地割りされた教王護国寺にしても都の中心を占めていたとはいいがたかったはずである。いったいこの平安京と鎌倉との相違の源泉はどこに存するのか。もちろんごく常識的には、平安京域中には原則として寺社が建てられなかったのに対して鎌倉は源頼朝が「中心」に鶴岡八幡宮を設置して創始されたこと、京ではほぼ９世紀から１０世紀の段階で祭礼の担い手となりうるような都市民が形成されつつあったが鎌倉では支配者によってはやばやと京の儀礼が移植された事情などで説明されることになるだろう。しかしそうした固有の事情があるからこそ、ここで都市鎌倉における「中心」がもつ特殊性は何であったかが論じられねばならないと思うのである。たとえば著者は、「初期の鶴岡八幡宮の供僧のほぼ半数が平家一門」であり、「そのことにも、生き残った平氏一族を僧侶として反乱を防ぐとともに、兵士の鎮魂をさせようとした頼朝の気持ちが読み取れる」という、非常に示唆的な言及にも踏み込んでいる。しかしそれならばこそ、鎌倉の政治的中心には勝者であり強者であるところの源氏の将軍がいて、もう一つの宗教的中心には敗者かつ（結果的に）弱者となった平家出身の僧がいたという、都市鎌倉の風景のもつ一種の「異様さ」について何らかの説明が欲しかったところであろう。これらの問題の扱い方によっては鶴岡はむしろ一つの大いなる周縁 —— 事実頼朝の時代には物理的に鎌倉の北端に位置していた —— であったという結論さえ不可能ではないという観点をも通過したうえで、「都市鎌倉の中心」とは何かということが考慮される必要があったと私は考える。鶴岡八幡宮は都市鎌倉の基軸となる若宮大路の基点となる位置を占める、いわば都市の象徴的基準地としての意味を担っていた。また、ほかにもたとえば鎌倉が当初から都市に対する宗教的しずめの施設を上段に据えて設立した事情をもっていたこと、京における宮中の機能が鎌倉では幕府と鶴岡八幡宮とに分散している（著者の挙げた鶴岡八幡宮仁王会もその一つの根拠となる）ことなども、鶴岡を「中心」たらしめていたといえよう。しかしながら、そこにはまたマージナルな面も存在したことも閑却されてはならないであろう。

鎌倉の主人であるところの「鎌倉殿」の居る御所は、常に鎌倉の平地部分にあった。そして平安京における大内裏にあたるような場所としては山の部分に鶴岡八幡宮があり、こちらが都市全体の形態を規定していくうえでの原点的基準地であった。このことの意味を考えるにあたって、次の二点を考慮する必要があると思われる。まず第一に、京都におい

ても鎌倉時代になってから天皇の所在地が東方の里内裏へと恒常的に移り、大内裏は荒廃して「内野」へと次第に変貌していくことがみられた。鶴岡八幡宮と大内裏跡地とを軽々しく同列に論じることはむろんできないが、奇しくもほぼ同時期に国の東西で同じようなことがみられるという暗合をどう評価するかが、問題となるであろう。いわば、中世日本の政都の形態的特性を押さえる視点である。いま一つは、封建都市としての鎌倉の性格を明確にする視点であり、これは広い意味での都市論の一環として、東アジアやヨーロッパなどの中世都市との比較の作業なども必要になることと思われる。

本書の「第三」では、寺院の境内絵図や結界絵図などをもとに鎌倉の周縁が論じられる。著者がここで周縁の寺院として取り上げた円覚寺・極楽寺・光明寺・金沢称名寺は、どれも陰陽道の攘災の儀礼である四角四境祭（四角は都の内部・四境は外部）の四境（元仁元（１２２４）年の場合は東が六浦、南が小壺、西が稲村、北は山内）の地に対応しているか、もしくは近辺に位置している。著者はこれらの寺院についても、絵画史料をもとにそれぞれにまつわる象徴的空間を分類している。この試み自体にも都市鎌倉研究における新しい視点を感じさせるものがあるが、私としてはその分析によって中心－周縁という関係の重層性の問題が浮かび上がったことにむしろ注目したい。すなわち周縁に位置する寺院の内外にもまたそれぞれ異なる意味を担ったゾーンが存在し、それらのなかに各寺院の最も聖なる部分を象徴する場所があったということは、周縁の内部にあってもさらに中心と周縁があることを意味していて、都市の構造が何重にも複雑に成り立っていた事実をあらわしているからである。

ところで、中世フランスの都市における托鉢修道会の展開を研究したジャック・ルゴフは、かつて中世都市の現象や景観を論じるための視点をマクロとミクロとの把握に分類した。彼によれば、マクロの把握とは托鉢修道会の都市内部における分布図を通して信仰革新の拠点となった都市の人口構成や社会構成を調べる方法であり、他方ミクロの把握とは都市内部のホット・スポットともいうべき地点（政治的中心としての領主や司教の館、宗教的中心である教会、商人権力の象徴として中心広場や市庁舎、司法の象徴の裁判所や罪人の晒し台）を押さえて相互の関係を知ることだとしている。いまこうした視点から本書の成果を論じるならば、ここではルゴフのいうミクロの把握、すなわち御所、鶴岡八幡宮、そして「四境」近くに位置する諸寺院、そして諸商業の中心地といった、いくつかの重要な都市鎌倉のホット・スポットに関する分析が貫徹されていることを見出すことができよう。本書の本領はまずこの点にあるともいえる。しかしまた、著者はマクロの把握についても可能な限り踏みこもうとしており、「第四」での鎌倉祇園会の実態を再現する取り組みはこうした角度からも読むことができる。この鎌倉祇園会については、従来あまり取り上げられる機会が少なかったこともあって、評者の個人的関心からしてももっとも興味をか

きたてられる箇所であった。著者はここで、中世の鎌倉祇園会の様相をうかがい知ることのできる数少ない史料、および近世史料からも類推して可能な限り中世のまつりを再現しようとしている。

最後に取り上げておきたいことがひとつある。著者は御所が若宮大路沿いに移ってからの鎌倉を、（鶴岡八幡宮や御所のある）中核的場から浜に向かって傾斜地をなし、前者から遠ざかるに従って身分の低い人々が生活する点に着目して「雛壇型都市」という理念型で理解することを以前から提唱している。確かにこれによって都市鎌倉の概観が把握しやすくなる面はあるにしても、私は以下の点でなお留意すべき問題もあるように考えている。まず、「雛壇型都市」はあくまでも鎌倉の平地部分に関してのみあてはまるもので、一方の「山の手」にあたる各々の谷戸の位置づけが曖昧になる恐れが強いことである。確かに、御所が大倉から若宮大路の近辺に移った時期は、幕府の祈祷において鶴岡八幡宮以外の寺院の比重が下がりつつあったということはいえよう。しかし、それでもなお鎌倉の都市としての領域が平地に限定されていったわけではなく、むしろ逆に広がりをみせていったのではなかったか。『とはずがたり』の「化粧坂といふ山を越えて、鎌倉の方を見れば、（中略）階などのやうに重々に、袋の中に物を入れたるやうに住まひたる」というくだりも、全体として凹型の地形に沿ってくまなく建物がひしめいている鎌倉のありさまを、京都との違いに重点をおいて表現したものとみるべきではないだろうか。従ってこのくだりを文字どおりにとれば、中心部の平地だけではなくもっと広い範囲の鎌倉の景観について描写したものと考えざるをえず、従って鎌倉を鳥瞰した時の印象としては谷戸がくまなく利用されているという感覚も強かったに違いないのである。また、「雛壇」という形容は南北間における階差が強調されたものであるが、「北」側を占める御所にしても頼朝以来つねに若宮大路の東側にしか存在しなかったことから、東西軸においても何らかの観念的不均衡が存在したのではないかという問題も指摘しておきたい。概して「雛壇」という語から連想される画像的イメージがあまりにも鮮明なものであるだけに、「雛壇型都市」という定義は都市鎌倉の概観を正確にとらえるうえでの両刃の剣となるのではないかということを、要するに私はいいたいのである。

とはいえ、本書における一連の考察は充分に刺激的であり、中世都市鎌倉のイメージを再認識する機会を本書を通してもてたことについては、松尾氏の功を多とすべきだろう。また本書は、文献史家である松尾氏が限られた史料を駆使しつつ歴史考古学の成果をも盛り込んだ成果なのであって、それを私が宗教学としての、解釈を求める立場から主に論評したことについては、氏にとってあるいは筋違いに感じられる箇所もあるやもしれず、また私がその浅学さゆえに読み違いをおかしていないともいいきれない。にもかかわらず私が書評の筆をとったのは、一つには松尾氏の視角のなかに宗教学にも連続するものを感じ

とったからであり、併せて都市鎌倉研究の今後の進展を興味深く見つめてゆきたいと考えている。

**注**

(1) 貫達人・石井進編『鎌倉の仏教　ー中世都市の実像ー』、１９９２、有隣堂、(「はしがき」)

(2) ジャック・ルゴフ「歴史学と民族学の現在　ー歴史学はどこへ行くかー」(二宮宏之編訳『歴史・文化・表象　ーアナール派と歴史人類学ー』、１９９２、岩波書店)。なお同書のあとがきによれば、ルゴフの１９７６年の講演を『思想』６３０（１９７６）に訳載したものだとのことである。

(3) 松尾剛次「中世都市・鎌倉」(五味文彦編『都市の中世』、１９９２、吉川弘文館)。